

2020. 3. 10.

令和元年度日本建築学会東北支部研究補助報告  
「東北地方の近現代建築資料に関する研究」

歴史意匠部会

日本の幕末から第二次世界大戦の終戦までに建った建築の台帳目録として編まれた『日本近代建築総覧』（1980）の刊行から40年が経つ。同書が建築の保存に果たした役割は大きく、また、同書を基盤にデータベース化が進められ、本会歴史的建築総目録データベース（以下、DB）となって今に至っている。一方、社会に目を向けると、同書の範囲から外れた第二次世界大戦後の建築（以下、戦後建築）までもが取り壊しの対象となっている現状がある。

建築の保存に当たり不可欠なのは、価値を見定めることである。したがって、価値を測るスケールが必要となるが、リストの未整備はそのスケールがないことを意味する。その結果、戦後建築については、その価値を見定めることはおろか、保存すべき対象をあらかじめ把握することもできず、解体が報じられてからの対応となりがちであった。

こうした状況に照らして、本研究では東北地方に建った戦後建築のリスト化を行った。具体的には、すでに作業の進む福島と建築史研究者の豊富な宮城を除いた4県（青森・岩手・秋田・山形）に20世紀中に完成した戦後建築について、『新建築』・『建築文化』などの建築関係雑誌や本会東北建築賞などの受賞資料などの媒体から、作品名・竣工年・設計者・施工者・所在地・構造規模などの情報を抽出した。その結果、青森：264件、岩手：170件、秋田：118件、山形：150件の計702件のリストを編んだ。青森と岩手の多さは、地元建築士会が発行する近現代を含む建築ガイドがあるためである。なお、この種の作業に漏れはつきものであり、今後継続されることが望ましい。それでもリストを見る限り、著名なものはおおよそ拾い上げたと考えられる。

これら戦後建築の傾向に触れると、年代別には、終戦から数年は、いずれの媒体にも掲載のない時期が続く。この傾向は日本全体に通じるが、東北は比較的それが長い。しかし50年代に入ると、秋田に白井晟一、戦前から縁のあった青森に前川國男の作品が現れ、続く60年代には、全国で活躍する建築家や組織事務所の作品が増え、70年代に入った頃より、宮脇檀などアトリエ的な建築家や、羽田他所夫など地方に拠点を置く建築家の作品が目につくようになる。

今後の作業としては、この分析を精緻かつ豊かにすることに加え、これらのリストのDBへの追加、そして、ここから様々に価値を読み取る中で保存すべき対象の抽出を行い、建設に当たって用意された図面や仕様書などの資料の残存状況を調べ、入手に努めていくことを予定している。本研究は、そうした作業の端緒に位置づけられるものであり、その意味で着手したこと自体に興味があると考えている。